イタリアオペラとフランスオペラのテノールアリア

「オペラ」(opera) という単語はイタリア語で「仕事」「作品」を意味し、元来は「opera musicale」（音楽的作品）と呼んだものの省略から、この語義が生じたとのことです。そのオペラの時代による流れに少し触れてみます。

ルネサンス後期の 16 世紀末、ギリシャ悲劇を模範に、歌うような台詞を用いる劇が考えられ「オペラ・セリア（正歌劇）」と呼ばれます。それに対し、世俗的な内容の作品が「オペラ・ブッファ（喜劇オペラ）」で、モーツァルト（1756 年-1791 年）の「フィガロの結婚」(1786 年)、「ドン・ジョヴァンニ」(1787 年)、「コジ・ファン・トゥッテ」(1790 年）が良く知られています。

18 世紀前半のバロック・オペラ時代後期には、ヘンデル（1685 年-1759 年）などが優れた作品を作ったものの、本場イタリアでは、人気歌手たちの声と技巧をひけらかして、劇としては堕落する傾向が出て来た中、ドイツ出身のグルック（1714 年-1787 年）は、ドラマの進行を第一とする方向に立ち返らせ、「オルフェオとエウリディーチェ」などを作曲しました。

18 世紀中期になると、オペラ・ブッファの影響をうけ、コミカルな内容を中心とした滑稽で軽い「オペラ・コミック」が登場しますが、18 世紀後期になると、「オペラ・コミック」はフランス革命期の社会的風潮の影響を受けて、喜劇的なものよりも英雄的で雄大な内容を持つものに変化し、19 世紀前半には隆盛を極め、ビゼー（1838 年-1875 年）の「カルメン」(1875 年)、オッフェンバックの「ホフマン物語」(1880 年、未完）などが生まれ、フランスオペラは、5 幕形式でバレエを含む大規模な形式の「グランド・オペラ」と呼ばれる様式となって行きます。

オペラの発展は、ドイツでは、ワーグナー（1813 年-1883 年)、イタリアではヴェルディ（1813 年-1901 年）によって、19 世紀に最も劇的な段階を迎えます。ワーグナーは、「楽劇」とよばれる独特のオペラで作品の大規模化をもたらします。一方、ヴェルディは、ワーグナーのような音楽の革命家ではありませんでしたが、「オペラ・セリア（正歌劇）」の伝統的形式を発展させ、登場人物の人間性に鋭く迫って劇的に表現する作風を確立し、音楽としてもドラマとしても完成度の高い「リゴレット」、「イル・トロヴァトーレ」、「椿姫」を生み出し、グランド・オペラの「アイーダ」(1871 年）「オテロ」(1887 年）なども残します。テノールのアリアとしては、「リゴレット」でマントヴァ伯爵が歌う有名な『女心の歌』、「イル・トロヴァトーレ」で吟遊詩人マンリーコが歌います『見よ、恐ろしい炎を』（難度の高い超高音である Hi-C が聴かせどころです)、「アイーダ」の冒頭で歌われますテノールのアリア『清きアイーダ』などがあります。

一方、1850 年頃により内面的な叙情性をもった「ドラム・リリク」が現れ、グノーの「ファウスト」（1859 年)、マスネの「ウェルテル」(1892 年）がその代表です。「ファウスト」で歌われるテノールのアリア『この清らかな住まい』は、5 分間くらい歌い続けた最後に「Hi-C」という超高音を歌うという難曲です。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてイタリア文学で隆盛した、「真実主義」あるいは「現実主義」というような意味の一種のリアリズム運動の「ヴェリズモ文学」に影響を受け、イタリア・オペラの新傾向として、「ヴェリズモ・オペラ（verismo opera)」が出現します。内容的には、同時代の日常生活を題材とし、暴力などの描写も多用し、音楽的には声楽技巧を廃した“直接的な感情表現”に重きを置き、重厚なオーケストレーションを駆使することがその特徴とされています。そうした傾

向をもっともよく示す作品としては、マスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」、レオンカヴァッロの「道化師」などがあります。同時代に作曲されたジョルダーノ「アンドレア・シェニエ」や、プッチーニの「トスカ」なども、その激しい感情表出に着目した場合「ヴェリズモ・オペラ」の範疇に含まれます。その激しい感情表出で、「ヴェリズモ・オペラ」の範疇に含められる、ウンベルト・ジョルダーノ作曲の「アンドレア・シェニエ」の第１幕で、テノールが演ずるアンドレア・シェニエが、“本当の愛とは何か”を、アリア『ある日青空をながめて』で歌い上げます。「アンドレア・シェニエ」の第４幕では、燃え上がる理想と変わることのない詩情に満ちた愛を歌う辞世の歌『五月の晴れた日のように』が歌われます。

ヴェリズモ・オペラでしばしば取り上げられる「殺人のような暴力」に関しては、オペラにあっては舞台裏で行われることが多いのですが、そのオペラの伝統を最初に打破してみせたオペラは、フランスオペラのビゼー「カルメン」です。第４幕でドン・ホセに刺されたカルメンは、舞台上でそのまま倒れて死にます。この「カルメン」が、1880 年ナポリでイタリア初演された後、イタリア全土でセンセーションを巻き起こし、この扇情的なオペラがイタリア人若手作曲家に強い刺激となり、後の「ヴェリズモ・オペラ」の変革に繋がっていったようです。その「カルメン」の第２幕で歌われますテノールのアリアが有名な『花の歌』です。

プッチーニ（1858 年-1924 年）は、ヴェリズモ・オペラの影響を受けつつも、イタリア・オペラの伝統に沿い、庶民的な題材と美しいメロディをバランスさせ、親しみやすい中にも完成度の高い作品群を作って人気を博しました。出世作「マノン・レスコー」（1893 年）と、それに続く「ラ・ボエーム」（1896 年）は好評をもって迎えられ、「トスカ」（1900 年）で頂点に立ちます。その後、1904 年に、ミラノのスカラ座で初演された「蝶々夫人」は大失敗だったのですが、同年５月に上演された改訂版の成功以来、今日ではあらゆるオペラの中でも人気の高い作品として知られるようになり、最後に「トゥーランドット」を遺します。テノールのアリアとしては、「マノン・レスコー」の『何と素晴らしい美人』、「ラ・ボエーム」の『冷たき手を』（このアリアでも「Hi-C」という超高音が歌われます）、「トスカ」の『妙なる調和』や『星も光りぬ』があり、プッチーニの遺作「トゥーランドット」の第３幕の冒頭では、有名な『誰も寝てはならぬ』が歌われます。

以上の文中に出て来ますテノールのアリア『女心の歌』『見よ、恐ろしい炎を』『清きアイーダ』『この清らかな住まい』『ある日青空をながめて』『五月の晴れた日のように』『花の歌』『何と素晴らしい美人』『冷たき手を』『妙なる調和』『星も光りぬ』『誰も寝てはならぬ』の全ては、CD「誰も寝てはならぬ / 米澤 傑 テノール・オペラアリア集（G. ステーファノ指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団）」でお聴き頂けますし、『清きアイーダ』『ある日青空をながめて』『五月の晴れた日のように』『星も光りぬ』『誰も寝てはならぬ』は、ライブ録音でコンサート会場での臨場感を味わえます CD「米澤 傑 テノール ライブ ～ オペラアリア・カンツォーネからミュージカル・映画音楽まで ～」にも収録されており、双方の CD とも、このホームページの「CD/DVD のご案内」の【楽天市場】米澤傑の通販 からご注文いただけます。

（2022 年 11 月 20 日 記）